

## 今日の天皇イデオロギーのとらえ方について

### はじめに

作家の三島由紀夫と「楯の会」学生長森田必勝が東京・市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監部に乱入、隊員に決起をうながし自決した三島事件から、ことは満一〇年を迎えます。『朝日新聞』<sup>(1)</sup>によりますと昨年一月二五日、小雨の中、東京牛込公会堂で開かれた「憂国忌」は延々五時間を過ぎても終らず、三島・森田の遺影が並べられた壇上から追悼のあいさつが続いたそうです。

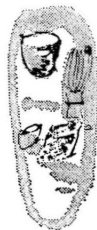
この席において、元号法制化運動をはじめこの数年間の天皇イデオロギーを核とする運動において常に中心的な役割を果たし、またソフトな顔とマイルドな声をもった作曲家として奥様族にも熱い視線を放たれる黛敏郎氏は次のような追悼

の言葉を述べたそうです。

「私たちにとって大事な問題、例えば建国記念日、有事立法、防衛、元号法制化。そのなかば以上が実現した現実には、三島さんの投じた精神的なクーデターが、今日、立派に実を結んだわけです」<sup>(2)</sup>。

三島の「精神的クーデター」がそのような役割を果たしたかどうかはさておきとして、「私たちにとって大事な問題」が「なかば以上が実現した」という氏の現実認識は、理性的にはそうは言えないと強がりを見せても、またこうした動き事態、体制側の危機の産物にはかならないのだと確認しても、やはり私たちの気持を暗いものにします。

宮地正人氏も「戦後天皇制の特質」という論文で「ここ数年間のうごきについて、私達の間で共通の確認事項をつくっておく必要があるでしょう」<sup>(3)</sup>として列記した右傾化の事実



（現実）は、「明治百年祭」以来数年間の空白をやぶって民主的な歴史学会における現代反動イデオロギー批判の活動を活発にし、また科学運動の再構築を促し、さらにはそれらにとどまらず黒田俊雄氏や安丸良夫氏の提言にみられるごとく、私たちの歴史学の方法そのものについての検討をよび起こしています。

さて、私の報告はこうした今日の反動化、右傾化の一つの中味をなしている天皇イデオロギーというものをどう捉えたらいのかという問題に対して、私なりの考え方を述べさせていただき、御批判を仰ごうとするものです。というのは今日の反動イデオロギーを分析する場合に、その中に占める天皇イデオロギー、あるいは皇国史観といわれるものの位置づけは、それを批判する論者の中でも必ずしも共通の認識が得られていないという問題があります。

宮地氏も先の論文で「現代天皇制とは何かという問題」が紀元節問題や明治百年祭、さらには靖国神社法案というかたちで「六〇年代後半に提起されていた」、つまり「国家権力は現代的近代化論で国民を右傾化させていこうとしているのか、あるいは皇国史観で国民を右傾化させていこうとしているのか」という問題が、しかしこの問題は今日なお未解決の問題として残されている、と述べています。

そしてこの問題が未解決であることが単に理論的な問題に

とどまらず、私たちの科学運動に対しても一つの困難性をもたらし（<sup>5</sup>）ていると思います。

さて、その場合、さしあたり私が検討の素材にさせていただこうと思っているのは、今日の反動イデオロギーを問題にする場合、「諸々の反動思想を本質規定的に一括してうまくすることなく、その内部での位置・役割、いわば入反動イデオロギー攻撃なるものの「陣形」を知ることではないか」と問題をたて、「前近代的・非科学的な性格の濃厚な旧い右翼思想——たとえば皇国史観・天皇崇拜主義・封建的な道德や宗教など——」は、「政治体制の主軸を掌握する支配層にとって、政治支配Ⅱ世論操作のための『道具』の一つではないように思われる」、「支配層にしてみれば、いわゆる右翼は反動イデオロギー攻撃の尖兵である、というよりはもっと適切には特攻隊である」、「右翼的思想は、劇薬に似た道具でもある。使いすぎるのは危険である。だから毒素が全人民にまわらないように、調合されて使用される。全国民がその劇薬にひたることは期待されておらず、ただ世論操作のための動因となり、方向づけとなり、またははずみをつけることで、その役割はすむ。狡兔死して走狗煮らる」という非情な入悲運は、つねにつきまとう」として、天皇イデオロギーを反動イデオロギーの本流からはずすという論調であります。

このような論調を極端にというか、はつきり述べたものに山口正之氏の論があります。氏はブルジョアジーは二つの統治方式をもっていると問題をたて、一つは「中世的・農奴的方法」、日本でいえば元号法制化や紀元節復活などの「封建的・軍国主義」の方法、もう一つは「純ブルジョアの現代的な方法」、「ブルジョア改良主義」の方法があり、思想宣伝では「自由社会を守れ」という形式での反共攻撃の方法である。そして大切なことは、この二つの方法の相違を区別し、その交替を見分け、両者の組合わせのあり方を認識することである。そして支配の方法の変化の主要な方向は資本主義が高度に発展すれば、国民の自覚が高まり、前者から後者へとすすむ、というものです。

私自身、論理的な問題としては、反動イデオロギー攻撃なるものの「陣形」を知ることの大切さ、佐々木隆爾氏の言葉をお借りすれば「思いつきのなもの、時流迎合的なもの」と本格的なものとの区別<sup>(9)</sup>の大切さに全く同感するものですが、しかしその上で天皇イデオロギーといわれるもの（この概念規定が問題なのでしょうが）を単純に「前近代的・非科学的な性格」であるとか「特攻隊」や「劇薬」になぞらえたり、ましてや「中世的・農奴的方法」と片づけることには納得できないのです。

たしかに本質規定をするということになるのかもしれない。

ませんが、そのことによってたくさんの方が落ちてしまい今日の反動イデオロギー支配の力の一面を見失ってしまうように思います。そういった意味において「戦後の反動化と、その反動化におけるイデオロギーの中核に、何故天皇というものがあきもせずくり返して出されてくるのか」、「しかもその出され方は時期が近くなるにしたがって強くなっているのです。なぜですか？」という宮地氏のイラ、だちに共感を覚えるものです。

私は結論として、今日の反動イデオロギーを考える場合に、先程の宮地氏の現代的近代化論か皇国史観かというレベルにおいては、どれが本流であり、どれが本格的なものであるのか、というふうには問題をたてない方がよい、むしろそれらの融合の状況をこそ問題にした方がよいと思っていますし、そしてそのことがはつきりしてきたのが六〇年代後半の状況と異なる今日の特徴だと考えています。

しかしここではそのことを本格的に問題にしようというものではありません。むしろこういった問題を考えるうえでも今日の天皇イデオロギーを捉える場合に注意しなくてはならないと思っているいくつかの問題を述べてみたいと思います。

まず最初に、今日の天皇イデオロギーを捉える場合、それを単に古いもの、旧態依然たるもの、荒唐無稽なものであるというふうにみる見方に対して疑問を呈しておきたいと思ひます。この疑問は私の中に長い間くすぶっていたものです、が、そのことをはっきり自覚させるキツカケになったのは、元号問題を考える中で、とりわけ『神社新報』に載った一地方の神職と神社本庁のナンバー・ワンのイデオログである葦津珍彦氏とのあいだにかわされた質疑応答を読んでからでした。この質疑応答は今日の元号法制化の極めて鋭い矛盾を露呈させた興味あるものであって、さすがに私たちの元号法制化反対運動の貴重な理論的営みであった歴研臨時大会報告「元号法制化問題とわれわれの歴史学」<sup>10)</sup>においても解釈改憲の一例証として紹介されております。一神職の質問とは次のようなものであります。元号決定のあり方は、「陛下の聖旨によって御裁可を経て決定するのが本来のあり方である。……それゆえ、現憲法下での元号法制は無意味であり、まず憲法改正が行なわれなければならない」という正論です。これに対して葦津氏は伊勢神宮の式年遷宮に際しての「陛下の御聴許」（戦後の式年遷宮は天皇の裁可ではなく、一民間団体が

天皇に「伺い」をたて、天皇の「御聴許」を得て行なうという形式がとられている）を引合いに出して、今日ではそれ以上の方法が実現したいので、そういう方法がとられているのであり、元号についても内閣の大臣が先程言ったような御聴許のかたちをとって陛下の思召しを承って決めるか、あるいは裁可というかたちをとって公布するか、そこには実質的に改元というような場合にはさしたる差があるというのではない」と述べ最後にこの部分が最も大切なところでありますが、「なまじりの法律論でまごついてはならない。国体の一つ一つを固めていくことが大切である」と回答しております。

この質疑応答は歴研臨時大会の報告者集団が指摘したとおり、彼らが解釈改憲の立場をとっていることを明瞭に示すものですが私が非常に興味深く思ったのは、そのことよりも葦津氏に代表される神社本庁の態度というか発想についてであります。私には一地方神職の疑問は決つて「なまじりの法律論」と感じられませんが、また「まごついて」いるものとも感じられません。むしろきわめて正論であり堂々としたものだと思います。むしろこうしたきわめてまっとうな意見があることに對して本庁側があわてて、高飛車に決めつけている姿を感じるものであり、その意味では葦津氏の答は回答というより恫喝であるときえ感じられるものです。そしてこうしたあり様は彼らの常套のものであるように思ひます。私は

日本近代思想史を専攻している者ですが、すぐに思い出したのは国家神道が成立する過程のことです。当時民衆にとって神道とはまぎれもなく宗教の一つにしか過ぎませんでしたし、また多くの神官や神道家にとってもそれはまぎれもなく唯一のそして真実の宗教（大教）でありました。しかし明治国家権力は近代国家において天皇制思想を国民に鼓吹するために、神道は宗教ではなく国家の祭祀であるという全く新しく強引な論理をつくりあげたのであります。そしてこの天皇権力を背景とした強引な強弁の中で神道Ⅱ宗教論にたつ有名・無名の「頑迷」、「固陋」な多くの神宮・神道家はうつつした思いで沈黙させられていったのです。

これらのことは彼らが好んで使う「日本文化」であるとか「伝統」とかいう言葉のギマン性をあらわすものですが、さしあたりここで注意していただきたい点は、天皇イデオロギーの推進者たちは私たちが思っている程、古いものでも旧態依然たるものでもなく、また荒唐無稽なものでもないということ、彼らなりにその時代時代の客観的情況というものを「正確」に必死に分析して、またその時代の新しい「理論」をとり入れてその中で彼らのすすむ方向（それが唯一のものでもなく、正しいものでもありませんが）をつぎつぎに打ち出してきたという点です。また彼らは私たちが思う程「伝統」主義者でも何でもなく彼らにとって実はもっとも大切なものと思

うものでも、またそれを大事にもっている神道家をも、時代や状況に応じて平気で捨てたり、切り捨てていくことが出来るものであるということです。そういった意味では、生命という言葉を使うのはこの場合にはふさわしくありませんが彼ら、及びそのイデオロギーは強い生命力、生きぬく力を持っているということでありま

す。こういうふうに見てきますと、以下に述べるようないくつかの事例もそれなりに納得のいくものだと思います。例えば日本において内面の自由の問題を初めて本格的に問うた津地鎮祭違憲訴訟において神社本庁側は、「地鎮祭は宗教的活動ではなく習俗である」という論理を主張しました。そして黒田氏も指摘している如くこの論理は文化人類学・社会学・民俗学などの新鮮な言葉で補強されておりました。最高裁は結局この論理で神社本庁側に勝利を与えたものでしたが、この裁判の過程で、この訴訟の膝元である三重県の須伎神社の神主田中英一氏は地鎮祭Ⅱ習俗論というのはとんでもないことで地鎮祭は「祭祀を主体とする神社神道の宗教活動の一環である」、「本来神道の祭儀は儀式の大小を問わず、唯一の宗教活動である」として、「神社神道の本質を守る」立場から神社本庁の主張に「不安」を感じ本庁側の敗訴を願ったのであります<sup>(12)</sup>。また『新宗教新聞』は最高裁の判決時の状況について次のように論評しました。「津市がわにいった神社人の

中には、神社神道をさほど重んじていない人が多いとみえて、裁判所からの神社神道にたいする、このような屈辱的な評価（地鎮祭<sup>11</sup>習俗）があつたのにもかかわらず、ノボリを打ちふりながら、バンザイを唱えたのであるから、まったく狂気の沙汰としかいいようはない<sup>12</sup>。同紙は新宗連の機関紙ですがこの論評は決してセクト（宗派）的な考え方ではなく心ある神職ともじゅうぶんに共感できるものであると思います。靖国問題や元号法制化さらには大嘗会を前にして、神社本庁側は何がなんでも最高裁で勝利せねばと思ったのでしょうか、実はそのことによって自らにとって最も大切なもの（祭祀・儀式）を辱しめたように思います。

もう一つ例をあげておきましょう。近年、各種選挙において宗教団体の活躍ぶりが世間の注目をあつめています<sup>13</sup>が、神社本庁も一九六九年に神道政治連盟なるものを発足させました。そして当面この組織方針としてまず地方組織を発足させること及び会員拡大の対象として一万余千人の神職をあてることにしました。ところがこの連盟の発足自体、神道界の指導部においても異論があり、それをそのままに見切り発車的になされただけでなく、一般神社人に対しては全く上意下達式に発足したものであるだけに当初かかげた組織方針はなかなか実現しませんでした。そこで『神社新報』はさまざまなキャンペーンをはりますが、その一つとして「神政連へ

の期待・希望・注文」という特集号を組みます。この特集号に載せられた一般の神職の意見はなかなか興味深く、たくさん論点をひきだすことができるものですが、さしあたっては次のような批判的意見を紹介しておきたいと思ひます。

「神道は国体的性質をもつ特殊の宗教である。他の宗教的政党と異なり、政治に係ることにより弊害を起こさないで済むであろうか」、「神道は政党、思想、場合によっては宗教の如何に拘らず之を抱擁し、日本国として団結して行く為め必要となる使命を持つているのである」<sup>14</sup>（三重県・船越神社神職・加治武雄）。私はこの神職の意見には神道といわれるものの非常に重要な一つの本質的なものが含まれていると考えております。そして連盟の結成に消極的ないし批判的意見には多くの考え方が踏まえていました。この意見に対する本庁ないし連盟側からのかみあつた反論は少くとも私の見たかぎりでは見つけることは出来ませんでした。但し神道政治連盟の推せんを受けて当選した議員たちによって構成されている神道議員連盟の会長である藤波孝生氏の次の発言が、本庁及び連盟の本音を率直に語っていると思ひます。「よく思うことがある。それは人みんな氏子<sup>15</sup>だといふ考え方、つまり八神社を否定する者も悪口をいふ者も、みんな氏子だと温く包んでゆくのが正しいのだ<sup>16</sup>という奇妙な考え方についてである。……戦後の神社人の勇氣のない態度<sup>17</sup>」だといふもので

す。「みんな氏子だ」という考え方が神社神道においてそれほど「奇妙な考え方」なのでしょいか。この考え方も神社神道の一つの本質的な論理なのではないのでしょうか、現に町内会での神社への不当な寄附はこういう論理で行なわれているのではないですか。この場合においても、私は一地方の神職の考え方こそ、伝統的な正論だと思ふのです。

以上、元号法制化問題、津地鎮祭違憲訴訟、そして神道政治連盟の発足という三つの素材をもとにして、神社本庁の指導層と一般神職層の間にある発想の違いとか、問題のたて方の違いというものを紹介してきましたが、総じて言えることは、今日の神社本庁のイデオロギーは黒田氏が比喩的使用しました如く「特攻隊」であるとか「劇薬」であるというようなものと少し異っていることです。そのイデオロギーは単純に古いものであるとして片づけられるものではなく、今日の長期・短期の状況に即応して、その状況を踏まえた新しい「理論」なり行動方針を打ち出していること、そしてそういう意味では一般神職層が持っているところの本庁側からみれば、それこそ「古い」、「旧態依然」的な、まさに「伝統的」な考え方を次々に捨てざり踏みこじって進んでいるということです。黒田氏の比喩的な表現をお借りすれば、それは決して「特攻隊」や「劇薬」というものではなく、むしろそうしたものに含意されている「純粹」さや「美しさ」ある

いは「悲運さ」というものを平気で捨てざり、踏みこじって、醜く、何んとか生き延びようという姿であります。黒田氏が天皇イデオロギーにつきまといっているとした「非情」さは、そのものにあるのではなく、そうしたものを意にかいさず捨てざり、踏みこじっていく「非情」さだと思ひます。

もつとも神社神道というものは、長い眼で見ればそういう歩みをしているからこそ、あの国家神道体制というものを今日心ある神職は肯定的には見ていないように、結局は国民から見離され、そして滅亡の道を歩んでいくのでしょうか（つけ加えておきますと、批判をあびることを思ひますが、そういう形で神社神道というものが自滅していく姿を喜ぶものではなく、むしろ悲しむものであります、当面の問題としては、天皇イデオロギーの本流としての神社本庁の右に指摘した特徴を私たちはしっかりとおさえておく必要があると思ひます）。

また関連することですが、天皇イデオロギーという場合に、それこそ何が本格的で何が思ひつきのなものであるかという区別をしつかりしておく必要があるということです。神社本庁は、あるいは神道政治連盟といつても確かに現実の勢力の上では小さいのですが、イデオロギーの面では何といつても伝統と権威を背景にして、大きな蓄積を持つており、私は今日の天皇イデオロギーのいわば本流に位置していると思ひます。その意味で戦後史におけるこの分析は大変重要な

意味をもっておりますが、残念ながら私たちは井口和起氏の分析しか持っていないように思います。この分野の分析を強化し、その特徴をしっかりとおさえることの必要性を強調するものであります。

## 二

さて次に今日の天皇イデオロギーを捉える場合に注意しておかなければならない二番目の問題について述べてみたいと思います。

この数年、教育勅語復活の動きが急になっていますが、特に本年は勅語発布九〇年（さらに「国旗」布告一一〇年、明治神宮造営六〇年だそうです）ということで、推進勢力は地方議会での「靖国」公式参拝実現の決議運動と併せて、この運動にとりこんでいます。例えば神社本庁は「急増する少年犯罪、子どもの自殺、荒廢した国民意識……は日本が一貫していただてきた精神生活の柱『教育勅語』を戦後の混乱期に否定させられ、この結果教育の柱を失ってこんな結果になった」と、再び教育勅語を国民教育の根本に据えようと策動しています。またその運動の集約点として、教育勅語の発布日である一〇月三〇日にあわせて、「靖国」公式参拝や元号法制化を主導してきた、右派教団グループの主導による「世界宗教

者倫理会議」なるものを開催（二〇月二九―三十一日）しようとしています。

さて、この教育勅語の問題を題材にして、問題を展開してみたいと思います。素材にするのは「日本を守る会」発行（監修・副島広之、絵・斎藤梅、文・秋永勝彦）の『たのしくまなぶ十二のちがい』教育勅語から▽（七九年五月初版）という絵本（児童本）です。「日本を守る会」については、かつて少し分析したことがありますので詳しくは触れませんが、私は、七四年に右派教団を核にして結成されたこの会こそ、紀元節や靖国、元号や日の丸、君が代、天皇問題等々、今日の天皇イデオロギーの総司令部であると思っています。そして監修者の副島氏は明治神宮権宮司であり、またこの会の事務総長、そして元号法制化実現国民会議の事務総長でもあったことは私たちの記憶に新しいところです。

私がこの本の存在を知ったのは、奈良の浜田博夫先生から教えていただいたのですが、実際にこの本を手にし、読んでいくうちにこれは大変な本であるという思いを強くしました。カラー写真でも御紹介することが出来れば良いのですが、まず装幀がなかなか立派なもので本文の紙質、色彩ともなかなか上質のものを使用しています。表紙は富士山と桜の花をバックに男の子と女の子が明るく笑いながら、そして男の子は右手をあげ呼びかけるようなポーズをとっています。



私にも一人の男の子がいて、この種の絵本もたくさんありますが、それらと並べて見ても決して見劣りのしないものです。

内容はどのようなものかと言いますと、教育勅語の第二段落の前半部分「爾臣民 父母ニ孝ニ」以下「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」まで、徳目を列挙した部分から十二の徳目を一つ一つとりだし見開き二ページを使って絵と子供むけの言葉、そして「お父さんお母さんへ」という欄を設けてその徳目についての解説をほどこしたものです。最後の見開きには教育勅語の全文と口語文訳、そして「教育勅語について」というやや詳しい解説文を載せてあります。

第一の徳目を例にとって一つだけ具体的に紹介しておきますと、まず右ページの片隅に「お父さんお母さんへ」という欄があつて「父母に孝——親や先祖を大切にしましう——」と見出しがあります。そしてその解説には「子供が親を尊敬し、大切にすることはだいじなことです。これを教えるには、お爺さんやお婆さんのおられる家庭では、自分の親に孝行する両親の姿を、また親子だけの家庭は、夫婦が互いに尊敬しあい、助けあつて生活している姿とおして、親は立派な人なのだということを無言のうちに教えるようにしたいものです」とあります。つまりこの解説でもわかるように、この本はたのしく学ぶ絵本という形をとっていますが、実は同

時に今日、子育てや教育に悩む父母たちをも対象にしたもので、父母のための子育て論、教育論を展開したものでもあります。絵は広いダイニング・ルームのテーブルに夫婦そして三人の子供が「お婆ちゃん」を囲むようにして描かれています。テーブルの上にはロウソクをたくさん立てたバースディ・ケーキが置かれ、「お婆ちゃん」がまさにその火を「フツ」と吹き消そうと前かがみになって口をすぼめています。そしてその一瞬をとらえて拍手をしようと若夫婦と二人の子供は手を合わせています。もう一人の男の子は「お婆ちゃん」の肩をもむようにして両手を預けています。子供むけの字は「お婆ちゃん／おたんじょうび／おめでとう／ぼくいうことをきいて／もっともっと／いいこになるよ／だからながいきしてね」とあります。

以上が第一の徳目「父母に孝」という部分であります。もっとたくさん御紹介できればよいのですが紙数に限りがありますので残念ながら省略せざるを得ません（この問題に関心のある方は是非、自分の手にとって読んで欲しいものだと思います）。この本から引き出すことの論点は極めてたくさんあります。例えば「日本を守る会」などが天皇イデオロギーを国民に浸透させる場合の観念として何を持ってこようとしているのか、また逆にそれに対抗するイデオロギーを粉砕するため

その一つに先祖という觀念があります。この言葉はいま紹介しました「父母に孝」のところにも出てきましたが、このことをより明瞭に示しているのは「教育勅語の口語文訳」のところで「朕惟フニ 我が皇祖皇宗」という最初の導入部分を「私は、私達の祖先が」としているところです。

しかしながら、全体として強く印象づけられたことは、この本が極めて現代的というか今日のどうか、今日の普通の国民の意識、心理情況からそう離れていないところで問題を提出し得ているなァということでした。挿絵を題材にとってもう少しこの点を展開いたしますと「兄弟に友——きょうだいは仲よくしましょう」で毛利元就の三本の矢の話し、「学を修め業を習う——勉学にはげみ職業を身につけましょう——」で二宮金次郎像をもつてきているところなどは、たしかに戦前のこの類のものとあまりかわりありませんが、その外の部分は例えば「夫婦相和す——夫婦はいつも仲むつまじくしましょう」では、広い芝生の庭で若夫婦が両手を握りあつて子供達が回す縄跳びの輪の中を跳んでいる絵（父母に孝）という部分と重ねあわすと家庭像としては中産階級意識にもとづくマイホーム主義に焦点を合わせている）に見られる如く全体として私たちの通念や願望からそうかけ離れていないものが題材として用いられているということです。また子どもむけの字はもちろん「お父さんお母さんへ」という解説文も例えば

「公益を広め 世務を開く——広く世の人々や社会のためにつくしましょう——」（挿絵は子供たちがターミナルの庭を掃除しているところ）の解説で「駅や街、鎮守さまなど公共の場所をお掃除……」という部分や「義勇 公に奉ず——正しい勇氣をもつて世のため国のためにつくしましょう——」（挿絵は自衛隊のレスキュー部隊が災害に出動しているところ）の解説で「戦争で死んでいった多くの兵士たちも、私たちの住む幸せな国を守るために奉仕した、本当に勇氣ある人々です」と彼らにとって時事的なまたイデオロギッシュな言葉を何気なくそつと挿入している部分だけが例外的で、あとは「父母に孝」のところで紹介した如く、「そこに示された徳目のひとつひとつは、まさに時代や国境を超えた人生の指針」、「人間としてふみ行うべき当然のこと」として描かれ書かれているということです。いやそれだけでなく「昨今青少年の非行化などがマスコミをにぎわす折から、私たちはもう一度、教育勅語に語られた真の精神をふりかえつて、現代に生かすことが必要ではないでしょうか」と問いかけられた時、誰でもそうだなァと思うように描かれているということですよ。

すなわちこの本は「日本を守る会」という今日の反動イデオロギー攻勢の総司令部にふさわしく、金の力と彼らなりの知力を総動員して、今日の天皇イデオロギーをいかに国民意識の中に下降させていくかという問題意識をもつて練りに練

って作成されたものと思います。<sup>(20)</sup>

また少し話しがとびますが、私がこの本を読んだ時に例の笹川良一氏（日本船舶振興会）の「お父さんお母さんを大切にしよう!」、「地球をきれいにしよう!」（さきの「公益ヲ広メ世務ヲ開ク」の挿絵）、「交通ルールを守ろう!」（「国憲ヲ重シ 国法ニ遵フ」では横断歩道を渡る子供の絵が載せられている）というテレビ・コマーシャルとその発想・スローガン・画材が極めて酷似しているなァという感じがしました。つまりこのコマーシャルも決して思いつきのものではなく、反動側の共通の「叡智」として出されてきていることに注意しておくことが必要でしょう。すなわち反動側はイデオロギー闘争において私たちとの空中戦ばかりではなく、そのイデオロギーの下降過程に極めて重大なそして大がかりな関心を持っていること、そしてあのコマーシャルが現代の学生や主婦層にとって必ずしも嫌みなものとしては映っていない、むしろ肯定的にとらえられているという現実にも注意をむける必要があると思います。

さて、私がこの絵本のことを紹介いたしましたのは、一つには「一」の部分で述べました如く、今日の天皇イデオロギーをたんに古いものであるという形で軽視してはならない、そうすることは敵を見誤ることになるというこの論を補強するものであり、また運動論レベルでいいますと、今日私た

ちの反動イデオロギー攻勢に対するたたかいが歴史学関係者だけではなく、幅広い、この本に関する点では子供を守る運動や母親運動と連帯してすすめられようとしていることの大切さ、もっとももっとこういう形の運動を繰りひろげることの大切さ、等を教えているものですが、しかしここではそれらのことよりも、私たちのイデオロギー批判のあり方について考えてみたからです。

すなわち、この数年間、私達の側の反動イデオロギー、天皇イデオロギー批判の作業はたしかに強化され、その対象は拡大されてきました。そして私たちのそれに対する知的蓄積は多くなってきたというわけですが、この思いは私だけの思いかも知れませんが、何んとなく靴の上から足を搔く感じ、もう一つしっくりこない感じがするのを禁じ得ません。この思いは私自身の反省でもあります。この思いは一つには、「はじめに」の部分で述べたように今日の反動イデオロギーの中において天皇イデオロギーの占める位置が不明確だということによってきているのだと思いますが、しかしそのことよりも今日の反動イデオロギー、天皇イデオロギーが、『十二のちかい』で紹介しました如く、国民意識との接点を十分に意識して下降してきているのに、必ずしも私たちの批判がこのレベルにまで立入って行なわれていない、逆にまた私たちの側の思想の提示がこのレベルにまで踏みこんで行なわれてい

ない、ということからきているように思います。

このことと関連しますが、こういう態度が出てくる背景として、少し乱暴になりますが私たちは反動イデオロギーというものを、そのデマゴギー性においてとらえるという指向が強すぎるのではないか、そして私たちはそのデマゴギー性を「理論的」にあばくという手法に陥入っている、それで事足れりとする傾向が強いのではないかとということです。

しかしながら、私たちのように一応、知的な作業を職にしているものには、なかなか自覚されにくいものですが、普通の国民意識のレベルで考えてみた場合、反動イデオロギーはそれなりに現実的基盤をもっている、あるいは少くともそれとの接点をもっているということです。先に紹介しました『十二のちかい』の如く問題を提起されれば「なる程そうだな」と思われるのは、たんに手法、テクニクの問題だけでなく、そのような内容を持っているということだと思います。

この点は元号法制化反対運動でも私たちはあらゆる角度から批判活動を展開いたしましたが、結局は元号使用に関する国民意識の壁を破れなかったように思いますし、津地鎮祭違憲訴訟においても結局は社会通念論に「敗れた」ように思います。この問題をたんに「権力が長い間強制してきたのであたりまえである」という論法ですますのではなく、そこに含まれている問題まで思いをめぐらさねばならないと思います。

もちろん、そうはいってもこれまでのイデオロギー批判が決して無意味であるというわけではなく、大きな意味をもっていますし、これからも、もっともっと強化されなければならぬと思いますが、私たちは反動イデオロギーのもつ現実的基盤というものを率直に見る必要がありますし、この点に触れたイデオロギー批判の方法をつくり出していく必要があるのではないのでしょうか。こうした点では安丸良夫氏が「近代の民衆像」で述べた「歴史学者の認識力は、制度や政策のかたちをとったり、誰の眼にもあからさまなイデオロギー的反動思想のかたちをとるさいには鋭敏なのですが、社会の深部で暗転してゆく気分や雰囲気、さらに社会の体質のようなものについては、それを認識してゆくの<sup>(2)</sup>にふさわしいような論理的枠組みや発想に乏しく、そうした領域で大きな成果があげられてきたとはいえないようです」と指摘している点は重要な点だと思います。

### 三

以上、今日の天皇イデオロギーを捉える場合に注意しなければならぬと思う点を二点程、述べてきましたが、最後にもう一つだけ問題を提起しておきたいと思っています。但し紙数もすでに超過しており、またこの点は私じしん十分に煮つめ

きっておりませんので、非常に大まかなものになることをお許し下さい。

今日の反動イデオロギーの中で、天皇イデオロギーを本流とみなさない考え方の共通の合意点は、今日、日本が世界第二位の生産力を誇る程、高度に発達した資本主義国に到達している以上、資本主義が未発達な段階で効力を発揮した天皇イデオロギーは、反動イデオロギーの本流を占めることは出来ない、という点にあると思います。とりわけ資本主義の発展によって、各種世論調査に示される如く、「中流意識」、「私生活中心主義」、「滅私奉公」型の意識が定着している以上、まさに「滅私奉公」型の天皇イデオロギーは有効性を発揮し得ない、というものだろうと思います。

これに対して、私が、一、二で述べた論点は、今日の天皇イデオロギーは、決して資本主義が未発達な（こういう捉え方自体、今日の研究においては、いろいろと問題を孕んでいます）段階における戦前のそれと同じものと考えてはならない、戦後社会の状況に応じて変化させてきていること、また今日のそれは必ずしも「滅私奉公」という概念でイメージされるものではなく、「中流意識」などとも十分に接点をもつて、今日の国民意識の状況とそう遠くないところで提出されている、ということでした。

ところが、私のこの論点も、私が検討の素材とさせていた

だいた論点も、今日の反動イデオロギーというものを、戦前の天皇制イデオロギーがそうであったように、国家観念から、日常の生活意識のレベルまで一元的に貫徹するものとして論をたてているという点では共通の土俵に立っていると思います。

しかしながら、国家と市民社会の分離という問題がありますが、それこそ高度に発達した日本において、かつてのように国家観念から日常生活の意識のレベルまで一元的に貫徹する支配イデオロギーというものは果して可能なのか、というふうに問題を立てて見てはどうか。すなわち今日における支配イデオロギーを考える場合に、国家観念レベルと日常生活の意識のレベルとに一応区分して、そういった意味では「二層構造」というか「二重構造」として全体をとらえる。そしてその上で天皇イデオロギーや「現代的近代化」論といわれるものがそれぞれのレベルで、どのような役割を果たしているのか、というふうに問題をたててみることも必要ではないかということです。そして私の見通しとしては、とりわけ国家観念レベル・国民統合論レベルでは天皇イデオロギーは極めて大きな意味をもつであろう、ということです。

最後の方はなはだ中途半端になりましたが、このへんで一応終わらせていただきたいと思います。

（本稿は本年二月一日に行なわれた京都における「建国記念

の日」不承認集会での報告をもとにしたものである。当日は時間の関係上「二」の部分を中心に行ったが、今回編集部の注文によりその後に出された論文も踏まえてやや論争ふうにとめたものである。

- (1) 『朝日新聞』八〇年一月九日、夕刊
- (2) 同右
- (3) 『歴史評論』三六四号(八〇年八月)
- (4) 黒田俊雄「歴史科学運動における進歩の立場」『歴史評論』三三四号、七八年二月、同「ハ神道V史研究の背景——今日の思想状況との関連のなかで——」『歴史科学』八〇号、七九年十二月、安丸良夫「前近代の民衆像」『歴史評論』三六三号、八〇年七月
- (5) 困難性というものではないが、例えば江口圭一氏が「元号法制化反対論の論理と背理」『歴史学研究』四七三号、七九年一〇月)で出された問題も、私には江口氏が戦前の国家神道体制や教育勅語に理念される教育体制等総じて天皇制イデオロギーを实体化する諸制度が存在している中で元号の意味もつ意味と、それらの多くが解体された戦後における元号の意味の区別を明確にされていない点に問題を感じるが、もっとも根底的にはこの問題が解決されていないところからくるように思う。
- (6) 黒田俊雄前掲『歴史科学』所収論文、但しこの論文は今日のイデオロギー状況を本格的にとりあげたものではなく、その意味ではあまりフェアではないが、今日の天皇イデオロギーのとらえ方についての一方の考え方を要領よく、的確に述べられているので拝借させていただいた。この点おことわりしておきたい。
- (7) 「未踏の時代への胎動」『文化評論』二二五号(八〇年一月)

- (8) 「今日の政治反動とイデオロギー状況」『歴史評論』三三三号(七九年九月)
- (9) 宮地正人、前掲論文
- (10) 『歴史学研究』四六七号(七九年四月)
- (11) 葦津珍彦「一世一元制の意義——精神文化の視点に立って——」『元号——いま問われているもの——』に再録
- (12) 『新宗教新聞』七十七年七月一〇日号
- (13) 『神社新報』六十九年一〇月一八日号
- (14) 『同右』七〇年一月一六日号
- (15) 『戦後靖国神社の国営化V運動Vについて』『日本史研究』一二六号、七二年六月、この論文は『神社新報』の分析を通じて、一九五〇年代と六〇年代の靖国神社国営化の論理の変化をしっかりと見ている。但しこの論文は本文で指摘した如く「明治百年祭」以降数年間続いた私たちの反動イデオロギー批判の空白期に出されたものであり、その意味で貴重なものであるが、反面七四年以降に顕在化する天皇イデオロギーの攻勢については十分に問題がたてられていないように思う。
- (17) 『神社新報』八〇年三月一五日号(『宗教と平和』一五九号八八〇年六月Vより再引)
- (18) 『十二のちかい——ハ教育勅語からV』の「教育勅語について」という解説
- (19) 同右
- (20) もっとも、全体としてこの本を「りっぱなもの」として紹介しすぎたようである。私事で恐縮であるが、私の妻は絵本を集めることに異常なほど趣味をもっている。そこでこの本の意見をきいて見ると、この本はあまり良い本ではないそうである。彼女はわりに感情的なので、多分に先入観があると思

うが「ここで描かれている子供の顔は、みなにこにこ笑っているが、子どもが本来的にもっている多様な個性や躍動感が全く見られない。みな「おりこうさん」として画一的に描かれている」と指摘した。なる程そう言われればその通りである。この絵を描いた斎藤梅という方はどういいう方であるかわからないけれども、案外、彼らの子供感が素直に出ているのかもしれない。

(21) 『歴史評論』三六三号(八〇年七月)。但し、私が二、で述べたことにもはねかえる点であるが、この論文では今日の国民の意識状況についてやや悲観的な面が強調されすぎているように思う。今日の青年の意識状況を保守主義的な意識形態にとらえ、その問題性を確認することの重要さはそのとおりであり、またそのことが等閑視されている中でそれを強調することも理解できる点であるが、民衆思想や意識の研究においてはそうした状況を克服していくメカニズムも、それこそ民衆の思想や意識に即して内在的に明らかにしていくことも必要なのではないか。民衆意識が孕んでいる問題性をどんなに深く構造的に解きあかしていても、そのことから決して克服のメカニズム、未来、可能性は出てこず、意図に反して、外在的な可能性や未来の提示にしかないと思う。例えば氏はその論文の注の中である事件をとりあげて、絶望的な状況におかれた父親にからうじて生きる勇気をあたえたものが四国巡礼や生長の家の信仰だったという事実を強い感銘をうけるものとしてとりあげているが、他方では『赤旗』(八〇年三月一四日号)のルポルタージュ、「女・日本列島に生きる」(一六)で障害児とバクチ好きの夫をかかえた妻が死ぬ程の苦しみからのがれるために新興宗教の道に入ったが、革新自治体の成立や施策、及び障害者の運動に支えられて、夫婦共々革新的な運動に参加していく姿が紹介されている。

たしかに量的に言えば前者のケースが多いであろうが、後者のケースも視野に入れた民衆意識の分析が今日求められているのではないであろうか(その意味では『赤旗』のルポルタージュも事実の紹介におわっている)。今日の反動イデオロギーとのたたかいかいにおいて、氏も指摘している如く民衆意識、国民意識の側からの分析が是非とも急務とされているだけに感じていることを述べさせていただいた。